

2024 年 3 月 23 日 (土) 午後 2 時-4 時

発表 四宮こころ

【カミュ・サン＝サーンス】

1835 年 10 月 9 日フランス・パリ-1921 年 12 月 16 日アルジェリア アルジェ

「在りし日の音楽家たち 今日音楽家たち」ロマン・ロラン著 355 頁より以下抜粋

とりわけ彼は終始あまりにもフランス人であった。かれは時によると私にはわれわれの 18 世紀の一文筆家であるような印象を与える。百科全集派の一人でもルソオの陣営の一人でもない。そうではなくヴォルテール派の一人である。かれはその派らしい明確な思想をもち、優雅で簡潔な表現をもち、精神の卓絶さをもっている。そしてそのためにかれの音楽は「単に高貴であるにとどまらず、立派な生まれの貴族の家柄の高貴さをもっている。」かれはそのためにもまた非のうちどころのない、いささか冷たい良識 (ボン・センス)「熱情のなかの冷静、幻想のなかの叡智、最も心乱される情緒のただ中であってすらつねに自制心を失わぬ判断力をもっている。」

①曲名：交響詩「詩の舞踏」(1874 年) 演奏：パリ管弦楽団

サン＝サーンスの管弦楽的効果は巧みな音色の調和によってもたらされるが、この作品にはガラガラ音を立てる骸骨の踊り子たちを象徴するシロフォンが目立って取り上げられている。

②曲名：交響詩「オンファールの紡ぎ車」(1871 年) 演奏：パリ管弦楽団

恐ろしいパリ・コミューンの直後の作曲であるが、その軽妙さと繊細なオーケストレーションからは直近の悲劇の影は感じられない。